

令和元年6月24日現在

機関番号：32516

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16633

研究課題名(和文)十七世紀オランダにおけるデカルト主義の宗教・政治思想とその影響

研究課題名(英文)The Religious and Political Thought of the Seventeenth-Century Dutch Cartesianism

研究代表者

加藤 喜之(Kato, Yoshiyuki)

東京基督教大学・神学部・准教授

研究者番号：00708761

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近世哲学研究においてデカルトとスピノザをつなぐ鍵とされるオランダ・デカルト主義に光をあてることで、(1)オランダ・デカルト主義における宗教と政治の関係、(2)オランダ・デカルト主義と哲学者スピノザの関係、(3)オランダ・デカルト主義者クラウベルクの宗教・哲学思想を明らかにすることを試みた。その結果として、近世における思想は、神学的な正統と異端の関係のなかで展開しており、急進的といわれるスピノザの思想の一部はすでにオランダ・デカルト主義者たちの著作に表れており、またさらには教会や伝統的な神学との関係においてデカルト主義者の思想にも多様性があることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来の近世哲学・思想史において看過されてきた宗教・政治的な側面に光をあてるために、十七世紀中盤から後半にかけてオランダで活躍したデカルト主義者たちの思想やテキストに注目した。彼らは正統的で伝統的なキリスト教神学の枠組みのなかで当時興隆した新しい哲学・科学思想を受容することを試みていたこともあり、こうした研究は、哲学や科学の発展においてキリスト教神学や教会政治という枠組みの理解が不可欠であることを明らかにできた。

研究成果の概要(英文)：By focusing on the seventeenth-century Dutch Cartesianism, which is supposed to link Descartes and Spinoza, the present research tried to elucidate how the Dutch Cartesians thought about the relationship between religion and politics. In addition, it tried to clarify the relationship between the Dutch Cartesianism and Spinoza as well as the philosophical thought of the quintessential Dutch Cartesian Johannes Clauberg. As a result, the research came to illuminate, first, how the early modern philosophy developed in relation to the religio-political environment of orthodoxy and heresy, second, how parts of Spinoza's so-called radicalism can already be seen in the works written by some of the Dutch Cartesians, and third, that insofar as the relationship to the church and the traditional theology were concerned, the Dutch Cartesianism was a diverse movement.

研究分野：人文学

キーワード：思想史 哲学 宗教学 キリスト教 オランダ スピノザ デカルト 十七世紀

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

従来の哲学・思想研究は、テキスト分析のみを中心としたものが多く、また、専門領域の自律性が過度に強調されたことによって、哲学、政治、宗教という初期近代においては交差していた主題が区別されて分析される傾向にあった。しかし近年、当時の知的文脈を重視する研究方法が注目を浴び、学際的にテキストやそのコンテキストを分析することによって、当時の思想をより重層的に理解することが可能になっている。近世の思想研究においても、国内外、とくにオランダの研究者を中心にこの手法が頻繁に用いられるようになってきている。研究代表者はこれまでも博士論文をはじめとしてこうした潮流のなかで研究活動を行い、とりわけ哲学者スピノザとの関係でオランダのデカルト主義に光をあてることによって、この領域での研究の発展に貢献してきた。

オランダ・デカルト主義とは、一方でネーデルラント共和国で唯一公的な教会として政府から承認されていたカルヴァン派の流れをくむ改革派教会の会員によって構成されており、彼らは新しいデカルトの哲学と伝統的な宗教の調和を試みた。もう一方で、彼らの多くはウィレム三世(1650-1702)総督の下に権力を集中させようとするオラニエ派に反対し、諸州の自治を優先した共和主義を唱えていた。こうした宗教・政治的な傾向が近世哲学の発展に多大な影響を及ぼしたことから、十七世紀のネーデルラント共和国のみならず西欧全体における知的潮流を理解するのにこの運動が重要な鍵となるのはいうまでもないだろう。

残念ながら国内では、オランダ・デカルト主義が研究対象とされることは少なかった。しかし研究代表者は、博士論文をふくむこれまでの研究でこの運動をとりあげてきた。具体的には、博士論文執筆の過程で、当時のオランダを代表するデカルト主義者クリストフ・ウィティキウス(1625-1687)の著作を分析し、キリスト教神学と哲学や自然科学が密接にからみあう当時の知的文脈を明らかにしてきた。また、この運動を批判した保守派神学者ペトルウス・ファン・マストリヒト(1630-1706)に関する研究と発表も行なった。さらに、もう一人の代表的なデカルト主義者クラウベルクに関しては、基礎文献と原典を分析し、研究発表を行った。その結果として、以下の結論を得つつあった。

第一に、オランダ・デカルト主義者は、宗教・政治思想を構築するにあたって、当時の最先端の哲学・科学理論を適用している。

第二に、彼らは宗教的に熱心であり、彼らの思想はおもにカルヴァン主義の神学に即している。

第三に、彼らはスピノザの思想を危険視しており、伝統的な宗教を守るための議論を展開させている。

これらの暫定的な結論は、本研究を行うにあたって重要な立脚点を与えてくれるものであった。

### 2. 研究の目的

研究代表者は以上の暫定的な結論を得つつあったが、分析した人物やテキストは限られており、包括的な理解とは言い難い。そのためこれらをふまえつつ、本研究は以下の三点を目的とした。

#### (1) オランダ・デカルト主義における宗教と政治の関係

第一に本研究は、十七世紀中盤のオランダにおける政治に注目し、そのなかでオランダ・デカルト主義の果たした役割を明らかにしていく。具体的には、ネーデルラント連邦共和国のホルント州法律顧問であったヨハン・デ・ウィット(1625-1672)とオランダ・デカルト主義者の関係に光をあてる。また、政治思想においても、ウィティキウスやクラウベルクの文献を紐解き、オランダ・デカルト主義者たちが、宗教と政治の関係をどのように認識していたかを明らかにしていく。

#### (2) オランダ・デカルト主義と哲学者スピノザの関係

第二に本研究で明らかにすべきことは、哲学者スピノザとの関係である。従来のスピノザ研究でも、オランダ・デカルト主義とスピノザの思想にはなんらかの関係が見いだされてきた。しかし、研究代表者がこれまで行ってきた、スピノザの批判者であるウィティキウスに関する研究が示すように、両者の具体的な関係を明らかにするには詳細なテキスト分析に基づく研究が必要である。また、スピノザとクラウベルクの関係进行分析していくことにより、これまで見えてこなかったスピノザが想定する論争相手が明確になり、スピノザの思想のさらなる理解の発展に貢献することができる。

#### (3) オランダ・デカルト主義者クラウベルクの宗教・哲学思想

最後に本研究は、代表的なオランダ・デカルト主義者であったクラウベルクの宗教・哲学思想を明らかにしていく。当時の知的・政治的な文脈のなかでクラウベルクの思想を分析することによって、デカルトとスピノザの間に存在する思想的な空隙をうめる。キリスト教神学を基礎にいたクラウベルクの宗教的なデカルト主義と、一切を自然現象として理解するスピノザの反キリスト教的なデカルト主義は、当時の科学・哲学理解の双壁をなしていた。したがってクラウベルクとスピノザを詳細に比較することで、近世における宗教と科学、さらには政治の関係を明らかにする。

### 3. 研究の方法

以上をふまえて、本研究において研究代表者がまず行うべきことは、第一に、十七世紀中盤のオランダにおける宗教と政治的な状況の理解と分析である。またそうした作業に平行させて、第二に、クラウベルクやウィティキウスの思想とスピノザの関わりを理解するための文献研究を行う。さらに、第三に、クラウベルク自身の著作集 (*Opera omnia philosophica*, 1691) のなかから、本研究に関係の深いいくつかの著作の分析を行う。以下、第一から第三の研究内容について詳述する。

#### (1) 十七世紀中盤のオランダにおける宗教・政治の状況

近年、特にオランダの研究者を中心として、十七世紀中盤の宗教・政治思想の変遷が如実に描き出されている。本研究では、最初にこの成果を包括的に分析していく。こうした研究成果によると、従来、非宗教的な営みとして考えられていた十七世紀オランダの自然哲学の伝統は、実際は宗教思想に大きな影響を受けていたという。こうした視点は、本研究に重要な視点を与えた。これらに加えて研究代表者は、アムステルダム大学図書館に所蔵されている、十七世紀にオランダのユトレヒト、ライデン両大学で行われた教授と学生による討論の記録を収集し、総合的に分析する。以上の文献研究をもとに、当時の宗教・政治思想の文脈を明確にしていく。

#### (2) スピノザとの関係

つぎに研究代表者は、オランダ・デカルト主義とスピノザの関係を明らかにするために、その宗教と政治という要素に注目しつつ、スピノザやウィティキウスのテクストを分析していく。スピノザに関しては、特に初期の『短論文』や『デカルトの哲学原理』また『書簡集』を分析することで、彼のデカルト主義への反応を分析していく。また、ウィティキウスに関しては、博士論文での議論をさらに発展させ、より包括的にデカルト主義者としての姿を浮き彫りにする。

#### (3) クラウベルクの著作集

十七世紀のオランダ・デカルト主義をさらに明らかにするために、代表的なデカルト主義者ヨハネス・クラウベルクの著作に注目する。研究代表者がこれまで分析してきた著作に加えて、クラウベルクの思想の体系が表れている諸著作のテクスト分析を行う。これらに加えて、重要な二次文献も適切に評価していく。

### 4. 研究成果

四年間の研究成果を以上の三つの研究目的に即して詳述する。

#### (1) 十七世紀中盤のオランダにおける宗教・政治の状況

本研究を開始する前は、オランダ国内における宗教・政治の状況の分析が主眼であった。しかし研究に従事するなか、こと近世哲学の発展を鑑みると、その思想的な根源である宗教改革における宗教・政治の状況の分析が不可欠であることが明らかになった。そのため、オランダのみならず、ドイツ、とくに宗教改革が開始された当初のヴィッテンベルクとルターの状況を分析した。この分析から近世における宗教・政治は、神学的な正統と異端の関係のなかで扱われることが明らかになった。十六世紀のヴィッテンベルクでみられたような論争の構造はオランダ・デカルト主義をめぐる論争の中にも表れており、この知見は、本研究課題全体に影響を及ぼすことになった。

#### (2) スピノザとの関係

オランダ・デカルト主義とスピノザの関係を分析するにあたって、研究代表者はスピノザの初期の文献を体系的に分析した。その分析結果をオランダ・デカルト主義者たちの概念システムに照らし合わせることで、スピノザ固有の思想だとこれまでみなされてきたものが、オランダ・デカルト主義者たちのものであることが明らかになった。とくに、自然法則と神の意志、さらには奇跡についてのスピノザの急進的だとみなされてきた主張は、デカルト主義者たちにも共有されているものであり、その革新性がスピノザのみに依拠するのではないことが明らかになった。

#### (3) クラウベルクの著作集

従来の研究では、クラウベルクの形而上学に注目が集まる傾向があり、彼の聖書解釈など神学的な要素は捨象されがちであった。研究代表者は、むしろデカルトの哲学がどのような神学的な構造、すなわち当時の改革派教会における正統派神学のなかに受容され、変容されていったかに注目することで、従来見落とされがちであった点を浮かび上げさせることに成功した。また、こうした分析を他のデカルト主義者と比較することで、画一的とみられがちなこの思想的な運動の多様性が明らかになった。その多様性は、とくに神学との関係において顕著であった。ウィティキウスと比較しても、クラウベルクはよりスピノザのような急進的な思想家に近く、ウィティキウスの著作からは、より正統的で保守的な神学の伝統に留まり続けるという傾向がみられた。

研究代表者は、以上の結果を国内外の学会や研究会やシンポジウム、さらには学術雑誌や図書などで積極的に報告してきた。その結果として、オランダの研究者、とりわけロッテルダム大学哲学部のハン・ファン・ルーラー教授との連携が深まった。彼を受け入れ教員として2017年度に開始した国際共同研究加速基金による事業によって本研究の課題は引き継がれた。

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4件)

加藤喜之「スピノザと悪の問題-神学・政治的な解決策」『宗教研究』査読有、93 巻 1 輯 (2019 年) 101-124 頁。

加藤喜之「デカルト哲学をめぐる論争-ヨハネス・クラウベルクとバルーフ・スピノザ」『スピノザーナ』査読有、第 16 号 (2017-2018 年) 93-114 頁。

〔学会発表〕(計 14 件)

加藤喜之「啓蒙と宗教: デカルトの哲学的言説をめぐる神学・政治的な争い」日本基督教学会、南山大学、2018 年 9 月 12 日

加藤喜之「十七世紀オランダにおける正統と異端: デカルト哲学をめぐる神学論争」日本基督教学会、広島女学院大学、2016 年 9 月 14 日

加藤喜之“ A Choice Between Descartes and Sozini: The Question of *Indifferentia* in the Calvinist Dutch Republic,” (パネル: *Recepta Sententia: Charting the Reformation's Philosophical Legacy*, Organizer and Chair: Kenneth G. Appold [Princeton Theological Seminary]) 十六世紀学会 (The Sixteenth Century Studies and Society Annual Conference), ブリュージュ、ベルギー、2016 年 8 月 19 日

加藤喜之“ The Defender of Faith: Christoph Wittichius and Spinoza's Radical Naturalism,” 富山国際シンポジウム 初期近代ヨーロッパの哲学とインテレクチュアル・ヒストリー Toyama International Conference Early Modern European Philosophy and Intellectual History, 主催: 富山大学・富山大学人文学部、共催: 日本ライプニッツ協会、富山大学、2016 年 2 月 13、14 日

加藤喜之「神の意志をめぐる論争: スピノザとカルヴァン派デカルト主義者たち」スピノザ研究会、大阪大学、2015 年 10 月 10 日

加藤喜之“ Spinoza and Theological Cartesianism: The Cases of Johannes Clauberg and Christoph Wittich,” CHPS Seminar, Center for the History of Philosophy and Science, Radboud University Nijmegen, 2015 年 9 月 18 日

〔図書〕(計 2 件)

加藤喜之他、ミネルヴァ書房、記憶と忘却のドイツ宗教改革-語りなおす歴史 1517-2017 年、2017 年、pp.352 (15-42)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年:  
国内外の別:

取得状況 (計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。